みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

文化人類学者の「呪薬」

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須藤, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5191

文化人類学者の「呪薬」

須藤健一

落胆の日々は、文化人類学者ならだれでもフィールドで経験しているだろう。資料はあつまらないし、調査地の事情もある。それでもフィールド・ワークはやめられない

文化人類学（民族学）が他の諸科学に互して独自の学問として誕生してから、一〇〇年もたっていない。今世紀初頭、欧米のアカデミズムのなかで、あたらしい学問となりえた文化人類学とはいったい何であるのか。他の学問と区別される存在理由はどこにあるのか。これは一人類学徒としてのわたしの頭のなかにうずまく、大きな疑問である。

大学で学んだ当初から、文化人類学は異民族の社会・文化を鏡にして自分の属す社会・文化を自省する学問であるとか、異文化を比較研究して人間社会の普遍

性をあきらかにするとか、また、異文化を理解し、解釈・翻訳することをめざしているなどと、この学問の目的について教えられてきた。

しかし、足かけ一〇年、人口一〇〇〇人に満たない南海の孤島へでかけ、島の人びとといっしょに暮らしてきたわたしには、かれらの生活や行動様式が「わかった」としても、かれらの社会全体のしくみや文化の深層、国家という枠組みのなかにしめるその社会の位置、さらには人類の一員としてのかれらの役割りといったことになると何の発言もできないのが現実である。また、かれらの心がよめたとおもっても、それはわたしの主観的なおもいあがりにすぎないのでは……との疑念にとらわれる。

文化人類学の目的を理屈のうえでは知っていても、自分のしていることとはなかなか結びつけえない。けれども、わたしはこの学問をおこなっているという自負はある。それはわたしがフィールド・ワークにうちこんでいることからきている。文化人類学者にとってフィールド・ワークとは一種の「呪薬」である。そして、文化人類学が学問として存立しうるのはフィールド・ワークがあるからだとひらき直らせてくれる。わたしのこのひらき直りのよりどころは、現代人類学の確立者、マリノフスキーの仕事にゆきつく。かれは一九一四年から一八年にかけ、

ニューギニアの島じまで調査をおこない、おおくの著作を世にだし、人類学の理論と方法を構築した。

マリノフスキーによると、人類学は真の学問的目的をもち、学問的知識を身につけて原住民のまっただなかで生活し、資料をあつめ専門的な方法にもとづいて原住民の生活様式を総合的に記述する学問であるという（『西太平洋の遠洋航海者』増田義郎・寺田和夫訳　一九六九年　中央公論社）。調査地の人びとともに生活しながらかれらの行動を見聞きすること（参与観察法）によって、調査地の人びとの社会や文化について、より全体的・客観的に著わしたものが「民族誌」である。つまり、文化人類学はフィールド・ワークの参与観察にもとづいて民族誌を書くことに第一の使命があるといえよう。

おおくのすぐれた民族誌を編みだしたマリノフスキーでも、フィールド・ワークでは幾多の苦難を経験している。ニューギニアのトロブリアンド諸島で、当初はことばが通じず人びとに相手にされなかったため、退屈で憂うつ、絶望感にさいなまれた落胆の日々をおくったと吐露している。

このような体験は、文化人類学者ならだれでもいやというほど味わわされているはずである。

ことあるごとに日米決戦

わたしは一九七四年の夏にはじめてのフィールド・ワークを経験した。現在のミクロネシア連邦トラック州の一離島においてである。ミクロネシアは第二次世界大戦終結までの三〇年間、「南洋群島」の名のもとに日本が委任統治していた。その当時、島民人口の二倍にあたる九万人もの邦人が移住していた。終戦後、日本人は強制帰国させられ、旧南洋群島はアメリカの信託統治領となった。日本人が築きあげた産業基盤も無に帰し、アメリカの経済援助に依存して現在にいたっている。

わたしが島を訪れたころ、日本との人の交流はすくなかったが、日本製のラジカセ、日用雑貨品、自動車などが、アメリカ製品をおしのけて幅をきかせていた。島の人びとは、敗戦国日本がアメリカを追い抜き世界一になったと感じていたようである。この島には戦前

戦没者の慰霊に訪れた日本の僧侶。トラック諸島の主島，モエン島で

に、ひとりの日本人商人が住んでおり、日本海軍の測候所もあった。人びとは三〇年ぶりに日本人が島へ帰ってきたとあって、わたしの一挙手一投足に熱い視線を注ぐことになる。

トラック諸島の主島、モエン島から四日間の船旅ののち島にあがったわたしは、男たちがあつまっている集会所で酋長に来島の意を告げ、四ヵ月の滞在の許しを乞うた。わたしのたどたどしい英語に業を煮やした酋長は、日本語のできる男を通訳に任命した(酋長もじつは英語を話せなかったのだが)。酋長はわたしが沖縄海洋博覧会の民族資料の収集にきたことの目的を理解してくれた。しかし、わたしが文化人類学の研究者であることを知ると、島の歴史や習慣などを調べることはいっさいまかりならんと語気をつよめた。モノを収集する許可はえたものの、わたしの本業ができないとあっては、この島にきた意味はない。ほかの島で調査をしようとおもったが、すでに島を離れた船を呆然とみおくるしかなかった。

酋長が調査を規制した理由は、アメリカの文化人類学者が島のタブーを破って人びとに迷惑をかけた事件にあったことを後日、教えられた。その事件とは、部外者に秘密となっている一族の系譜伝承をアメリカの学者がテープにとったために、教えた人の一族のなかに死者や病人がでたというものである。それはわたし

がもっとも知りたいテーマのひとつであったために、失望感がいっそうつよくなった。しかし、数日してから、酋長がわたしのことをアメリカの学者とはちがい、島のしきたりを知っているようだと集会の場で口にしたといううわさが耳にはいった。それはわたしが酋長に防水用腕時計と島の人びとにおおくのタオルを贈ったことにある。「日本人は貢物(みつぎもの)の習慣を忘れていない」と評価されたらしい。酋長にとりいるつもりはなかったが、モノの収集をつづけながら、島の人のけがの手当てや病人に薬をあげたりする日々をおくった。

島の高等学校にひとりのアメリカ人青年、Y君が英語の教師として勤めていた。島の人びとは日本人とアメリカ人のどちらがつよいかをくらべてみたかったらしく、わたしとY君を島の仕事や行事に「招待」した。文化人類学の調査はかれらとの人間関係をつくりあげることからはじまると観念し、わたしは酋長の命令にしたがった。

まずは、島の男総出の共同漁への参加である。これは広大なサンゴ礁で五〇人もの男が輪をつくり、潜水しながら魚を網に追い込む漁法である。波のあるリーフ(裾礁)の外での追い込みは命がけの仕事である。早朝から午後二時まで、休む暇もなくつづく。わたしとY君は島の男たちにおくれまいと必死だ。輪をせばめ

て魚を網に追いやる段階になると男たちは殺気だち、魚は「よわい」男のところから逃げだそうと突進する。口がながくするどい歯のあるサヨリやダツの大群の攻撃をうけるときは、目をつむって岩にしがみつくしかない。Y君がたまらず身を引いたために、漁獲ゼロという結果になった。それをみた男たちは、「日本人が勝った」と絶叫したのである。

このような日米決戦は、カヌーでの魚つり、ココヤシの皮むき、運動会などでもくりひろげられた。島の人びとは、輸入する「もの」で戦後の日本の国力を想像していたが、「ひと」をとおして日本そのものを知りたかったのである。長老たちの目には、日本代表選手（わたし）のたくましい姿が、

広大なサンゴ礁でおこなわれる追い込み漁

戦前の日本のつよさのイメージと重なって写ったようである。しかし、月日がたつのに調査もできず長老たちのピエロ役に徹しているわたしは、何のためにここにいるのだろうかとむなしさとあせりがつのるばかりであった。

若者たちの生き方はゆるせない

わたしを駆りだした背景には、長老たちが日本時代を回想するだけでなく、もうひとつのねらいがあった。戦後四〇年間、産業基盤のないミクロネシアは、アメリカの莫大な経済援助にささえられてきた。ミクロネシアを「アメリカの動物園」と表現する研究者もいる。それはほしいときに、ほしいものをアメリカがあたえてくれるという援助政策への皮肉である。若者はアメリカの教育制度のもとで、アメリカ式のかんがえを志向するようになった。ハワイや本国の大学に留学した若きエリートたちは、政府の役人や教職につき、自由主義の生き方を実行する。英語を話せない親世代の意見や伝統文化を軽んじる。その傾向は家族生活にもおよんできた。若者のあいだで、自分の給料で妻子との水いらずの暮らしが流行している。いわゆる、「核家族」の出現である。

トラックの家族は母系の出自（系譜）と妻方居住方式によってなりたってきた。

代々同世代の姉妹はひとつ屋敷に住み、男がムコにはいる。主食のタロイモ(サトイモ)、パンノキやココヤシの実をとる土地は一族の共有で、女たちが収穫したものをもちより、共同で料理する。子どもの養育や教育に責任をもつのは、その父親でなく母の兄弟である。しかし、ムコいりした男(父親)は子どもや妻の一族のために粉骨砕身、魚とりにでたりコプラをつくって現金を稼がなければならない。なまけようものなら、妻から「三くだり半」をいいわたされ、すごすご実家に帰るしかない。つまり、トラックの家族は、母親と子どもの絆(きずな)のもとに、兄弟姉妹の結合によってなりたっているのである。そのような家族観のもとで暮らしてきた長老たちは、アメリカ風の「近代化」によって島のしきたりが崩壊してゆくのを目のあたりにして危機感をいだいている。

サラリーを手にしても、親や姉妹に気を配らず、妻と子どものために消費してしまうエリートたち。働かなくてもアメリカの援助プログラムに顔をだして現金を手にし、おおかたを酒につぎこんでしまう若者の生き方を長老たちは許せない。しかし、サラリーマンや若者にもいい分はある。自動車やモーター・ボートのローンの支払いをすると、手許にのこる月給は二〇〇ドルにも満たない。とても親キョウダイにまわす余裕はない。トラックの若者は公けの場で勇敢さと力をしめ

すことで「一人前の男」になるとみなされてきた。その機会がなくなったいま、酒を飲んで暴力に訴えるしか手段がないではないか、というものである。

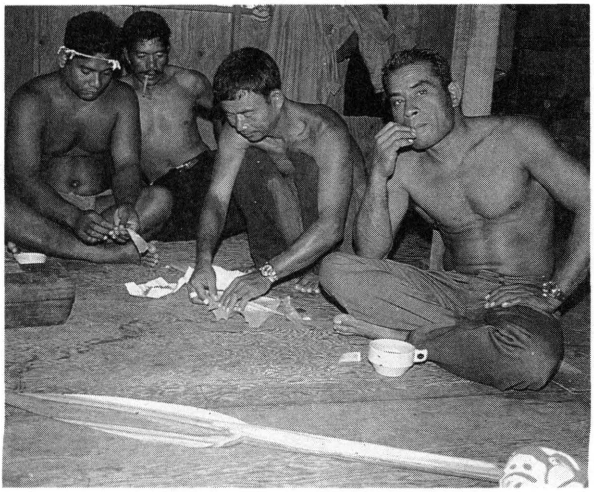
島の長老たちは、自分勝手な行動にでる若者を「イワシの罐詰め」にたとえる。それは「頭」がない、つまりかんがえが足りないことを意味する。そして、若者をそのようにしたのはアメリカの教育のせいだとかんがえている。かれらは、反アメリカ化、伝統文化の重視を喚起するために、日本を例にあげたのである。

島の人びとへの借り

島でのわたしの調査は、はからずもミクロネシア（トラック）を舞台にした、日本とアメリカの比較文化論に終始しそうになった。長老たちはそれで満足かも知れないが、二ヵ月が過ぎても、本来のわたしの調査テーマに関する資料はいっこうにあつまらない。ここでわたしは反撃に転じた。まずは、酋長と有力者に酒をふるまう作戦をたてた。この島では若者の飲酒による暴力事件をきっかけに、半年前から禁酒がつづいていた。わたしももちこんだ三本のウイスキーを口もつけずにかくしていた。この作戦は、島の権力者で禁酒令を発した酋長にみずから「掟（おきて）」をやぶらせようというものである。わたしの招きにのった酋長は、家のな

かで静かに飲むならよいとグラスをあけるうちに、最後は大声で日本の軍歌をうたいだす始末であった。

酋長の命令は大したことがないと知ったわたしは、数日後、きびしいタブーである酋長一族の起源伝承、系譜、首長位継承争いの話しを酋長から直接聞くことにした。このときTシャツやたばこを献上したのであるが、かれは三日間にわたり秘伝を教えてくれた。そのうえ、集会でわたしの調査に協力するように人びとに指示したのである。以降、わたしは家いえをまわり、家族関係、財産所有状況などをつぎつぎに調べた。長老からもカヌーづくりや航海術などの秘儀的知識の伝授をうけた。緊張感もほぐれ、わたしのペースで調査がすすんだ。しかし、人びとが病気になると気前よく薬をあげて



わたしの宿舎にいりびたる男たち。コーヒー，タバコの支給がわたしのつとめとなった

いたため、わたしが高熱の伝染病（デング熱）にかかったときには、解熱剤をはじめクロマイの一錠ものこっていなかった。とうとう、クリスマスにきた船に飛び乗って島を離れる破目になった。

それからわたしは、三度にわたりトラックを訪れ、かれらと旧交を温めている。そのたびに、文化人類学の原点は、フィールド・ワークにあることを実感させられる。精神的・肉体的につらい経験をすればするほどフィールド・ワークにのめりこんでしまう。これは、しょせん異人でしかない一人類学徒が、かれらとのより「ふかい関係」をもとめるあがきなのであろうか。わたしには、かれらの社会と文化について、双方の意にかなった民族誌を書かねばならない、という借りがある。